

艦娘の夏

瑞穂国

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦娘たちと艦長や提督たちが、夏を満喫する短編集。

※

C96に出した小説です。

(7月25日「8、吹雪」を公開しました)

目次

| | |
|--------|----|
| Ω、はじめに | 59 |
| X、コロラド | 49 |
| 8、吹雪 | 40 |
| 7、祥鳳 | 33 |
| 6、アイオワ | 26 |
| 5、瑞穂 | 21 |
| 4、神通 | 15 |
| 3、摩耶 | 10 |
| 2、曙 | 5 |
| 1、由良 | 1 |

1、由良

その光景は、私にとってどこか、現実離れたもののように映りました。

梅雨も明けた初夏の昼下がりに。気の早い蝉の声が聞こえる、サイパン基地庁舎の真新しい廊下。その人は妙なものを抱えて、私の視界に現れました。

「あらら、由良じゃない」

首を傾げるばかりの私——由良を認めたらしい私の艦長は、ゆっくりとこちらへ歩み寄ってきます。その歩調につられて、かさかさとして彼女の抱えたものが揺れました。

「艦長さん、あの、それは？」

「ああ、これ？ 笹だよ、実家から届いてたから、さつき貰ってきたんだ」艦長はそう言つて、またかさかさ、笹を揺らします。しゅつとした枝に、細い葉が特徴的な植物です。

「艦内に飾るんですか？」

よく、艦橋や自室に、花や小物を飾る艦長です。もしかしてこの笹も、そのためにどこかから持ってきた、のかな。

「あー、うん、それもあるんだけどね。——そうだ、丁度いい。一緒においでよ由良」

そう言つて笑い、艦長は付いてくるよう促します。特にすることもなかった私は、言われるがまま、艦長の後に従いました。水兵たちの敬礼に軽く答えながら、艦長はすたすたと進んでいきます。

庁舎を出て、工廠から埠頭を歩く間、時折、熟練の下士官から、「今年もやるんですね、中尉」と声がかかりました。それに「応、暇なときに顔を出せ」と返しながら、艦長は軽やかに「由良」の甲板へと上つていきます。舷門の当直も、突然現れた笹に驚いたようでしたが、「もうそんな時期ですねえ」と呑気に漏らしていました。

「我が家の伝統みたいなものなんだ」

天井の低い艦内を艦長室へと向かいながら、艦長が苦笑します。どういう意味、かな。艦長の実家では、よくやることなのかな。

艦長公室の扉を肘と足で器用に開き、室内へと入っていきます。一仕事やり終えたといった様子で笹を置いた艦長は、そのままその笹を壁に吊るし始めます。紐でくくられた笹が、壁から提がって葉をしならせました。

「七夕って知ってる？」

笹の出来に満足げな艦長がそう訊いてきます。聞いたことのない単語に、私は首を振りました。

「昔の、星にまつわる伝説だね。織姫と牽牛っていう男女が結婚したんだけど。お互いに夢中になり過ぎて、仕事をおろそかにした二人は、天の帝の怒りを買って、川によって隔てられてしまった。この川っていうのは、天の川のこと、織姫はベガ、牽牛はアルタイルを差してるんだ」

天測の本を思い出します。どれも、夏の夜に見える星のことです。

「・・・二人は、どうなったんですか」

「離れ離れのままじゃあ可哀そうだから、ってことで、一年に一度、七月七日の夜にだけ、二人は会うことが許された。その夜のことを七夕と呼ぶんだ。で、この伝説にあやかっ、お祭りなんかがあるんだけど。他にも、この短冊に願い事を書いて、笹に吊るしたりするんだよ」

そう言いながら、艦長は背後から、細長く切られた色紙を取り出しました。端に紐が付けられたそれを、彼女はにこやかに手渡してきます。もちろん、私に、です。

「はい。てことでこれ、由良の分ね」

私はそれを、少し戸惑いながら受け取ります。

願い事、と言われても。正直何を書いていいものか、よくわからないうのです。

困惑が顔に出ていたのか、艦長が助け舟を出してくれました。

「何でもいいんだよ。由良の欲しいものとか、叶えたいこととか。こうだったらいいな、っていう未来なら、立派な願い事だからね」

艦長から渡された短冊を片手に、私は自室でもまだ考えていまし

た。

欲しいもの、叶えたいこと。・・・こうだったらいいな、っていう未来。艦長は、そう言っていたけれど。それがどんなものなのか、いまいちはずきりと掴めません。

例えば、次の作戦がうまくいったらいいな、とか。そういうことだったら思い浮かぶんですけど。艦長の言っていたことは、多分、それとは全く違うこと、ですよ。

私自身の、欲しいもの、叶えたいこと。そんなこと、今まで考えた事ありませんでした。

「そんなに難しく考えなくていいんだよ？」

苦笑を浮かべる艦長とは、夕食の席で向かいになりました。彼女には、私の悩みなんて、お見通しみたいです。

「あの・・・でもやっぱり、よくわからなくて」

私の言葉に、艦長は少し考える仕種をします。

「あんまり何かを欲しがったりしないもんね、由良は。———それじゃあ、由良はどんな未来で、生きていたい？どんな未来で過ごしたい？未来の由良の周りには、何かがある？誰がいる？」

艦長は、質問の内容を、変えてきました。これだったら、何か思いつくんじゃない？、と。

私は、ほんの少しの間、目を閉じて考えます。艦長の言ったような、私の未来を思い描きます。

そうして。私の頭に浮かんだのは、この艦のこと。

司厨長。砲術長。水雷長。機関長。舷門の当直と、思い思いの余暇を過ごす下士官、水兵たち。

目の前の、自慢げに口角を上げる、艦長のこと。

こんな日が、いつまでも続いたらな、なんて。ずっとこの人たちと、一緒にいられたらな、なんて。私のいたい、叶えたい未来は、そんな場所でした。戦争中には、過ぎた願い、かな。

『ずっと一緒にいられますように』

鉛筆で恐々書いた、私の願い事。それをしげしげと見つめます。

「書けた？」

急に尋ねた艦長の声に、肩を跳ね上げます。私は思わず、短冊を背後に隠しました。

「は、はい」

「なんて書いたの？見せて見せて」

「だ、だめですっ」

だって・・・なんだか、恥ずかしいから。私にとっては、とても自然で、当たり前に近い、願い事だけど。それを知られるのは、むずかしい。

「か、艦長は、どんなことをお願いするんですか？」

「ごまかすための質問に、知ってか知らずか、艦長は答えます。」

「由良と同じだよ」

眩いばかりに、彼女は笑っていました。

2、曙

使い古されたサイパン基地第四埠頭は、目と鼻の先にまで迫っていた。

着岸作業に入った時点で、あたしにはやることなくなっている。自分の艦をタグボートに委ね、舳が取られるのを待つばかり。すぐ隣に見える水上機母艦〔瑞穂〕と軽巡洋艦〔神通〕を、あたしはただボーッと眺めていた。

ダメだダメだ、これじゃいけない。左右に強く頭を振る。既に切れかけの集中力を無理矢理引き戻せば、隣の艦長があたしの名前を呼んだ。

「曙」

あたしを見下ろす位置からの声。いやまあ、単純にあたしの背が低くて、彼の背が高いただけなんだけど。何だか頭から声が降ってくるのは、気に食わない。

「なに？」

「着岸したら、俺はそのまま報告に行く。曙はどうする？」

陸の庁舎に泊まるか、このまま艦内に泊まるか。艦長はつまり、そういうことを訊いている。庁舎に泊まるなら、一応申請と書類が必要だ。

「いい。そのまま艦に泊まる」

もちろん、陸の庁舎の方が宿泊設備はいいわけだけど。あたし的には、なんとなく、収まりが悪いのだ。それよりは、住み慣れた艦内の方が、落ち着いて寝ることができる。

「そうか、わかった」

あたしの返答に、艦長が頷いた。丁度その時、舷側が岸壁と接触し、三本目、四本目の舳が出される。後はムアリングウインチで、適切な長さまで巻き上げてやるだけだ。

同時に、タラップの準備も進めている。固定位置から釣り上げてあるし、あとは舷外へと振り出すのみだ。ある程度まで降ろせば、岸壁側の作業員が手すりの固定までやってくれる。

細々した作業を粛々と進め、十分ほどで着岸作業が終わった。それを確認した艦長が、制帽を被り直し、踵を返す。

「それじゃあ、行ってくる。留守は任せた」

生真面目な声に「任されたわ」と答えて、艦長を送り出した。そのまま彼は、艦橋後方のラツタルへと向かっていく。

あたしは大きく息を吐いた。ともあれ、これで仕事は一通り終わりだ。今日のところはのんびり過ごして、風呂に浸かりながら疲れを癒すしよう。

「・・・あ、そうだ」

そこであたしは、一つ大事なことを忘れていることに気づいた。確かに泊まるのは艦内だけど、風呂と食事は陸で済ませたい。二週間の作戦中、海水シャワーと簡易食ばかりだった。久しぶりに思いっきり羽を伸ばして、おいしいものを腹一杯に食べたい。風呂と食堂には世話になると、届け出ておかなければ。

慌てて駆け出し、艦長の後を追う。彼は丁度、ラツタルを下り終わったところだった。

「ねえ、クソ艦長！」

呼び止めたあたしに、艦長は振り向いて言った。

「風呂と食事は陸で申請しておく」

出かかった言葉を飲み込む。殊勝に頷くことしかできず、それが何だか悔しい。

「よろしく」

あたしの返事を確認して、艦長はタラップを下りて行く。その背中に、せめてもの反抗で「クソ艦長」と言っておいた。

艦内に一人取り残されたあたしは、時間を持て余していた。気付けば釣竿を持ち出し、舷側から釣り糸を垂らす。大したもの釣れないが、暇潰しくらいにはなるだろう。

変に力めば、魚は寄ってこない。釣り糸を垂らし、ただぼんやりと海面を見つめる。獲物が掛かれば引き上げ、針を外してリリース。また釣り糸を垂らし、プラプラと足を揺らす。その繰り返しだ。

全く非生産的なあたしを余所に、時間だけが過ぎていく。夏も終わりに近い。蟬の声もまばらで、潮の音に負けてしまっていた。ただあたしだけが、大人しく残暑の風に吹かれている。

どれくらい時間が経っただろう。いつの間に戻って来たのか、艦長が横に立っていた。その手にはあたしのより大きめの釣竿。

「ん」

顎だけで指し示したあたしの隣に、艦長が黙って腰かける。

作戦中はともかく、元々口数が少ない男だ。何考えてるのかは全くわからない。ただ何かと、あたしとは感性が合う。だから居心地がいいし、だから苛立ちもする。それは多分、向こうも同じだろう。

無言の時間。時折ポツポツと会話があっても、すぐ二人とも黙ってしまう。それでも一向に構わない。

風呂も食事もいいけど、こうして大人しくしてる時が、作戦の完遂を一番肌で感じられるかもしれない。

やがて陽が傾いてきた。どちらからともなく立ち上がったあたしたちは、別段示し合わせたわけでもなく、揃って風呂へと向かいだす。食事もなんとなく一緒になった。

結局、代わり映えのしない光景。あたしたちの日常。まあそれでも、いいのかもしれない。そんな風に思う自分がいたりして。

月明りと電灯の照らす夜を「曙」へと戻っていく。明日は何をして暇を潰すか。とりあえず次の作戦が始まるまで、こんな生活が続きそうだった。

◇

結論から言えば、あたしたちが作戦に参加することは、二度となかった。

理由は単純で、三十年に亘った深海棲艦との戦争が、終わったからだった。まあ、まだ「組織的な」戦闘が終了しただけで、これからも度々、戦闘はあるのかもしれないけど。

元々、あたしたちが押していた。特にここ二年間は、明らかに深海

棲艦の活動が下火になっていったし。こんな日がいつか来るかもとは思っていたけど、まさかこれほど早いなんて。

人間側の勝利宣言に沸いている市民たち。だけどその歓声は、ここ〔曙〕までは届いて来ない。いつも通りの静かな艦内で、あたしは今日も釣り糸を垂れている。

「曙はどうする」

こちららも、さも当たり前のように隣に立っていた艦長が、あたしに尋ねる。それがいつもと違う問いかけだと、さすがにあたしも気づいていた。

さてと。これから果たして、どうしたものだろうか。

「別に何も。決めてないわよ。なるようになるんじゃない」

引くのが一瞬早かったのか、かかりかけていた魚に逃げられる。軽い溜め息が漏れた。

今はこれが、あたしの精一杯だ。

「・・・どうだ。しばらく、俺と一緒にいないか」

予想だにしない言葉が、衝撃となってあたしに襲いかかって来た。あたふたと慌てて、釣竿を落としそうになる。

頬が熱い。このクソ艦長、ほんとに意味わかって言ってるのか。

「行く当てがないのなら、しばらくの生活を保障できる。それに、俺は曙という方が、楽しい」

ごまかすように、艦長が早口でまくし立てる。無口な彼には珍しい様子だ。

疑うことなんてない。迷う必要もない。だって多分、最初から答えは決まっている。

「・・・ま、それもいいかもね」

それにあたしも、やっぱりこいつと一緒に、楽しいから。さすがにそれは、恥ずかしくて言えなかった。

「このロリコン」

代わりと言ってはなんだけど。艦長の方を流し見ながら、あたしはそう言うておく。

以来、あたしたちの会話に、新しい話題が加わった。

3、摩耶

第二世代の奴らと違って、あたしの心臓——コアは深海棲艦のものからできていた。

産まれてきた時のことはよく覚えていない。気付けば「摩耶」の艦橋にいて、この体と意識を持っていた。ただ、それだけだ。自分はここにあっても、それがどんなものなのかに興味はない。あたしの出生も含めて、だ。

この身が深海棲艦を沈めようと、何も感じるものはない。かつての同胞を殺めることに罪悪感を抱く第一世代の艦娘もいるらしい。逆に、敵のコアを持つ艦娘を、危険視する人間もいるらしい。

あたしに言わせれば、そんなことはどうでもいい。たまたまあたしは、深海棲艦と同じコアを持つているだけ。ただ、それだけの事実だ。そこに意味なんてない。呉量産工廠で建造された、「高雄」シリーズ二十三番艦。人類初のコア装備艦。それ以上でも、それ以下でもない。だから、と言うつもりもないが。多分元々、あたしは命つてもものに興味が薄い。自分が生きていようが死んでいようが、どうでもいいんだ。他人が生きていようが死んでいようが、どうでもいい。あらゆる命に関心がなかった。

だからこうして、今まさに海へ溶けようとしているっていうのに、別に違和感も、恐怖も、忌避もない。艦体を失い、あたし自身も深い傷を負ったのに、「ああそうか、こんなもんか」と、そんな受け入れ方をすればかりだ。

あたしにとって、生きているなんてことはそんなものだ。

・・・ただ。目の前でこちらを見つめる、こいつのことだけは。あたしについてきた、この艦長だけは。

なんでここに、いるんだよ。

薄くなる意識の中、あたしにとって唯一、思い出らしい記憶を手繰る。



軍艦の人格（この表現もおかしなものだが）として造られたあたしは、同じ第一世代の艦娘たちの中でも、特に人間を避けていた方だと、自覚はしている。

そもその話。「摩耶」に人間を乗せる必要なんてない。この艦はあたし一人ですら十分動かせる。深海棲艦にできることが、同じコアを持つあたしにできないなんて道理はない。奴らは人間を乗せなかつたって、戦っているじゃないか。

まあ別に、人間が嫌いなわけではない。別に嫌いではないが、彼らと関わることはひどく億劫に思えた。だから必要以上に関わらない。艦の運航に関わる最低限の会話しかしないし、停泊中は陸に上がらず艦内で過ごす。それがあたしと、艦長以下乗組員三十人の距離感だ。それでいいのだと思っていた。周りの艦娘たちのように、まるで人間のように振舞うことはできなかったから。

そんなあたしに、積極的に関わってくる人間もいなかった。ただし、例外が現れる。あたしが艦娘になって四年目に、新しく着任した艦長だった。

聞けば、中尉なりたての新人だとか。それも女性。あたしのところに来る前は、他の軽巡で航海長をしていたらしい。

珍しいとは思った。とは言っても、それ以上の興味が湧くこともない。今まで通り、特に関わることなく、過ごせばいいだけだと思っていた。

だが、向こうは違つたらしい。

着任した次の日から、艦長による付きまといが始まつた。

「摩耶」

「摩耶っ」

「まーやー！」

「摩耶ちゃんっ！」

停泊中は、それこそ毎日のように、朝一番であたしの部屋を訪れる。いくらこつちが無視しても、決してやめたりはしない。

作戦中だつてそうだ。戦闘に関係ないこと——食事のこと、季節

のこと、趣味のこと、本当にどうでもいい、他愛のない話を、延々と振ってくる。

七夕、とかいう行事の時には、特にしつこく話しかけてきた。「摩耶の願い事は何?」、と。

何なんだ、この艦長は。

あたしが自室の扉を開いたのは、もう夏が随分経過してからだった。

なんで開けてしまったのかは・・・今もって正直わからない。憶えているのは、扉を開いた先に、少し驚いた様子の艦長がいたことだ。けど、それも一瞬のことで、彼女は輝く笑みを浮かべながら右手に提げていたものを掲げた。

「スイカ、食べない?」

随分と大きな、丸い玉のようなものを、艦長はスイカと呼んだ。何だそれは、食べれるのか。あたしが訊くと、彼女が頷く。

「甘くておいしいんだ。夏の暑いときにはぴつたりだよ」

そのまま、艦長は半ば強引にあたしの手を取る。スイカとやらを抱え、あたしを引っ張り、艦内をすたすたと進んでいった。

向かった先は、司厨部の厨房だった。中にいた司厨長が、こちらを見て目を真ん丸にしていた。

「司厨長、スイカを切ってもらえるか」

「え、ええ、もちろんですよ。ご実家からですか?」

「応。皆の分もあるから、夜にでも出してやってくれ」

奥の方から、「よしっ」という言葉が聞こえてきた。

「お安い御用です。『白雪姫』と食べるんですか?」

慣れた手つきでスイカを切り始める司厨長。艦長はなぜかあたしにウインクしてから、

「まあ、そんなとこ」

普段より砕けた様子で答えていた。

切り分けたスイカを持って、艦長はまたどこぞへと歩きだす。急な階段を器用に上り、ハッチをくぐって出た先は、リノリウム張りの後

甲板だった。

停泊中ということもあつて、後甲板には白いカンバスがかけられている。夏の日差しを遮るには丁度よかった。随分と久しぶりに浴びる、真昼の太陽だった。

「さ、食べよう！」

そう言った艦長は、靴を脱ぎ捨て、涼しげな裸足を舷外へと放り出していた。あたしもそれに倣つて、艦長の横に腰かける。

目の前に、先ほどのスイカが差し出された。

「はい、どうぞ」

三角形に切られたスイカは、それでも両手で持たなければいけないくらいには大きかった。鮮やかな赤色をしている果肉。黒くて小さい種。

どうしたらいいのかわからず、艦長の方を見る。彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべて、そして一気に、スイカにかぶりついた。

思わず、口が開いてしまう。艦長の一口は、信じられないくらい大きかった。三角形の頂点部分から半分ほどがごっそりと、彼女の口の中へ消えていた。

「ん〜」

艦長は、それはそれはおいしそうに、スイカを咀嚼していた。

あたしもスイカに食いついてみる。

随分と水っぽい食べ物だ、そう思った。だけど二回、三回と噛むうちに、淑やかな甘さが広がって来た。

ああ、なるほど。これは確かに。

「うまい・・・」

あたしは呟いていた。ハツとして艦長を見る。彼女はニヨニヨと今まで見たことのない笑顔を浮かべていた。

「摩耶、種は？」

「は？食べたけど」

「食べちゃったかー」

待て、食べるものじゃないのか。艦長が平然と食べるから、そのまま食べるものだと思った。

「食べない人の方が多いいんじゃない？私は気にしないけど」

気にしていたら、たくさん食べられないから、だそうだ。艦長の言うことにも一理あるような気がして、あたしは結局、種も一緒に食べることにした。

スイカを食べながら、艦長はまた、他愛のない話を始める。あたしもそれに、ポツポツと答える。なぜだかその時は、そんな気分だった。「なあ、艦長。なんで、あたしに構うんだ」

気になっていたことを訊いてみる。艦長はさも当たり前のように答えた。

「艦内で女子って、私たち二人だけじゃない。せつかくだから仲良くしたくて」

ああ、そうか。そういうものなのか。納得したようではないよな、妙な心持ちのまま、ただ思った。たまには艦長と話すのも、悪くない。

◇

・・・他愛のないことを、思い出してしまった。

閉じかけていた両目を開く。あたしに向けて、必死に手を伸ばすその人を見る。すでにほとんど力のないその目を見る。

わかってるだろ。

最後の力で、足を一かき。そのまま、彼女の体を押し上げる。もう何があっても、ここへは来ないように。間違ってもあたしなんかについて来ないように。

「生きろよ」

そう呟いたつもりのあたしの声は、果たして水中で、彼女まで届いただろうか。

4、神通

日も暮れると、真夏日和も少し柔らかくなってきました。月明かりが食堂の舷窓から淡く差し、どこか幻想的な雰囲気醸し出します。それを、海の中みたい、と思ったのは、私が船から生み出された存在だから、でしょうか。

そんな、ありもしない感傷に浸っていた私を、騒がしい声が現実に取り戻しました。

「神通さん！さあさあ、もっと飲みましょう！」

そうやって、赤い顔の男性が私を手招きします。随分とお酒が回っている様子の彼は、私、神通という艦娘が動かす軍艦の、機関員をしている方です。艦内でも大酒飲みで知られる彼は、いつにも増して飲んでいきます。その片手には、大事そうに一升瓶が握られています。彼だけではありません。あちこちでお酒を酌み交わす水兵たち。賑やかな会話。中には歌を歌いだす者まで。食堂全体が、異様なまでの熱気と喧騒に包まれています。

意識を持つてから初めて経験する、これがどんちゃん騒ぎ。それも無理からぬことと思います。

何しろ今日は、私たち艦娘の初陣の勝利を祝う会が開かれているのですから。

〔神通〕の乗組員だけでなく、作戦に参加した十二隻、それに参加していない艦まで。各々の艦では、いつになく豪勢な食事が振る舞われ、お酒も出されて無礼講となっています。

私も、勧められるままに料理を取り、お酒も少々いただきましたが……さすがに、若い盛り男性には敵いません。お腹も膨れて、顔もどこか熱いです。

「ありがとうございます。でも、もうお腹が一杯なので、遠慮しておきますね」

「あー、そうですか。わかりました。では自分がいただきますー！」

特に気を悪くした様子もなく、彼はニカッと笑って、一升瓶をラツパ飲みしようとしてました。中身は日本酒です。さすがにそれは……

大丈夫でしょうか。

私がそんな心配をしていると、彼の後頭部を鋭く叩く手がありました。スパン。気持ちがいいほどの快音が響きます。彼を叩いたのは、艦長でした。

「調子に乗るなあ、へっぽこ。お前、途中で吐いた前科持ちだろうが」
艦長に頭を叩かれた機関員は、「やべっ」とぼつの悪い顔をします。それを見た周りが、笑いに包まれました。

「お前にこんないい酒はやれん。俺がもらう」

「そ、それはひどいですよ、艦長」

本当に泣きそうな顔で、機関員が苦言を呈します。今まさに艦長が没収しようとしている銘柄は、主計長も入手に一苦労したほどのものだとか。相当いいお酒のようです。

「意見具申は認めん。艦長命令だ」

「そんなー」

あまりにも理不尽な、そして本気とおふぎけが半々で混じったやり取りに、食堂は再び笑いに包まれました。

一旦会場を抜け出した私は、足元を確かめながら階段を上り、鉄の扉を開けました。その先に広がっているのは、月明かりの支配する夜の甲板。白く淡い光が、艀装の鈍色を照らしています。音と呼べるものは、発電機の稼働音、それに伴う煙突からの排気、足元のどんちゃん騒ぎ、それから時折吹く潮風。それが、今の私の世界の、全てでした。

「気持ちいい」

涼しい潮風が、お酒で火照った私の体を爽やかに洗い流してくれます。涼気を胸一杯に取り込もうと、深呼吸を一つ。腕を伸ばした拍子に足が少しふらつきました。私が思っていたより、お酒が回っていたみたいです。

一息を吐きながら、私は甲板の上に腰を下ろしました。夜気を吸い込んでヒンヤリと冷たくなったりノリウムが、熱の籠った体から温度を奪っていきます。ふわふわとどこか夢見心地だった意識が、段々と

覚醒してきました。

月明りを見上げます。雲一つない空から降り注ぐ白い光。体の内側が何かで満たされていくような感覚。艦娘としての感覚。

この体故の感覚。まだ少し、慣れてはいません。艦としての自分を自覚しているからか、時折感覚のずれをおぼえます。

でも、それを嫌なものとは、感じません。

ふと、背後で扉が開く音がしました。金属を擦るような甲高く、重々しい音の後、リノリウムを叩くコツコツという足音が響きます。とてもしつかりとした足取りに聞こえました。

「気分転換かい？」

隣にゆっくりと腰を下ろしてきたのは、艦長でした。片手には先ほど機関員から没収していた、いい銘柄のお酒。

「はい。少し飲み過ぎてしまって・・・夜風に当たろうかと」

「そうかい」

笑って頷いた艦長は、どこから取り出したコップに、並々と日本酒を注ぎます。私の隣に座ったまま、月の姿を仰ぎ見るように、クイツとコップを傾けました。それから満足げに、熱の籠った息を吐きます。

「月見酒というのも、また格別でね」

艦長はそう呟いていました。

「月見、酒・・・？」

聞きなれない単語を反芻します。月を見ながら、お酒を飲む、ということでしょうか？

「ああ、うん。美しい月を、おいしいお酒に映す。それを眺める。そういう、風流というやつでね」

艦長が、私の方にお酒のコップを差し出してくれます。覗き込むと、その液面には確かに、丸く大きな月が映っていました。

「どうだい？まるで月を捕まえたみたいだろう？」

ニヤリ、艦長が笑います。つられて私も、頬を綻ばせていました。

「面白いことをお考えになるのですね」

「はは、娘の受け売りだがね。そう思ってもらえたのなら、よかつた

よ」

再びコップを煽り、艦長はお酒を飲み干します。そう言えばこの方も、お酒には滅法強い方でした。

「…あの、艦長。私ももう少し、お酒をもらっても、よろしいでしょうか？」

思わず頼んでしまったのは、艦長があまりにも楽しそうに、お酒を飲んでいたから、でしょう。二杯目を注ぎ始めていた艦長は、ニコリと笑って、やはりどこからか二個目のコップを取り出しました。

「半分くらいでいいかい？」

確認に私が頷くと、澄み渡った液体をゆっくり注いでくれます。コップのちようど真ん中あたりまで入った日本酒。その液面を覗くと、先ほどと同じように、黄色くて真ん丸の月が映っていました。液面の揺れにあわせて、その光がキラキラと七変化を遂げます。

お酒にゆっくりと口をつけます。冷却されていた体に、唇から再び熱が伝わっていきます。あまり嫌な熱さではありませんでした。むしろ冷たい月明りと合わさって、心地よささえあります。

「おいしいです」

先ほどと同じお酒のはずなのに、また違ったもののように感じます。そのわずかな相違が、不可思議でした。

しばらく、月とお酒を静かに楽しみます。それが一番、おいしい飲み方のような気がしました。

やがて、コップのお酒がなくなった頃、ふと思い出したように、私の口から言葉が漏れます。

「この先、どうなるのでしょうか」

言ってしまうから、ハツとします。それは漠然とした不安。お酒のせいで漏れ出た、私の内のわだかまり。でもきつと、それは艦長も——今回の戦いに参加した誰もが思っていることのはず。けれど、誰も口にしなかったことのはずです。

確かに私たちは、今回勝利を収めました。でもこれからは？

勝利が、私たちに考える余裕をくれました。けれどそれは、全く見えないこの先を、見つめてしまうことでもあります。

余計なことを、言ってしまったかもしれません。口にしてしまったは今更です。

「・・・なるようにしかならないだろうね」

艦長から返ってきた言葉は、珍しくはつきりしないものでした。その意味を掴めず、私は彼の顔を窺います。その目が笑っています。

「今のは無責任な言い方だったね」

「いえ・・・」

「誰も彼も、見通しなんてない。深海棲艦が現れたことで、生きていくことは存外に難しいことだったと、思い出したからね。今生きているだけで精一杯だよ」

だから。艦長はそう言って、空のコップを、そして頭上の月を見ました。

「未来を考えるのは、もっと余裕ができてからだっ方がいい。それまではゆっくり、月でも眺めているのが一番だよ。よくわからない未来の自分ではなくて、今日の自分に『よく頑張った』って言えば、それで十分だからね」

・・・なんと言うのでしょうか。前向きに、後ろ向きなことを言っている、といえますか。

私の中に初めて現れた、「未来」という概念。それを肯定も否定もすることなく、ただそこにあるものとして艦長は見ています。それがとても不思議に思えました。

「・・・酒が過ぎたかもしれないね。君を見ていると、娘を思い出して仕方がない」

「・・・艦長の、娘さんは？」

「海軍の軍人になったよ。今度は、軽巡の航海長に配属らしい」

そう言って、艦長は一枚の写真を取り出します。映っているのは、三人の人物。左に立つ艦長。右の、初老の女性は、奥様でしょうか。そして真ん中には、真新しい軍服姿の、女性が一人。

「昔から、『お父さんみたいに海軍に行く！』が口癖だね」

写真を愛おしそうに眺める艦長は、しかしポツリ、「戦時じゃなければ、もっと素直に喜べたのかな」と、呟いていました。

「長々と、話に付き合わせてしまったね」

写真を仕舞う艦長に、私は首を横に振って答えます。彼は薄く笑って、よっこいせと立ち上がりました。私はただじっと、その顔を見上げます。

「先に戻るよ。風邪、引かないようにね」

軽く手を振って艦内へ戻る艦長を、私は座ったまま見送ります。その背中がハッチの向こうへ消えたところで、私はまた、月を見上げました。

お酒に映って揺らめいていた月は、今も儂い存在感で夜に浮かんでいます。ポツリと、まるで取り残された一隻の船のように。

しばらくその姿を見つめた私は、夜が冷え切る前に立ち上がって、艦内へと戻りました。いまだ、未来へのほのかな想いを抱いたまま。

5、瑞穂

部屋の扉をノックすると、中からすぐに返事がありました。

滑りのいい引き戸を開き、瑞穂は中を覗きます。そこには、何やら荷物をまとめる、男性の姿が。

「いらっしやい、瑞穂」

部屋の中で待つ彼は、そう瑞穂を呼んで微笑みます。明るい色合いの髪と、すらりとした立ち姿がトレードマークの男性です。

「艦長、いらしてたのですね」

「はは、やめてくれ、その呼び方は。もう退役した身だ。僕も、君もね」
瑞穂の呼びかけに、彼は微笑しながらかぶりを振ります。言われてみれば、全くもってその通り、なのですが……。やはり、染みついた習慣というのはそうそう治せるものでもなく。また他に適切な呼び方も見つからず。瑞穂は結局、彼のことを「艦長」と呼び続けています。

彼が瑞穂の艦長でなくなってから、もう十年近く経っているのに。可笑しなものですね。

彼はやんわりと否定しても、拒絶することはありませんでした。

「提督の——お母様の荷物を、取りにいらしたのですか」

「うん、そうなんだ。いつまでもこのまま、っていうわけにもいかないし。瑞穂にまかせつきりも申し訳ないしね」

部屋全体を、そして窓際のベッドを見遣って、艦長は寂しげな表情を浮かべます。

艦長のお母様も、彼と同じく海軍に勤務する軍人でした。深海棲艦との戦争には初期から関わっていて、多くの艦で艦長を務めてきた方です。戦争後期にはいわゆる艦隊指揮官の提督や、各地の鎮守府や基地の司令を歴任していた、海軍随一の女傑と呼ばれるほどの人物でもあります。

瑞穂が初めて彼女にお会いしたのは、ここサイパンでのこと。丁度彼女がサイパン基地司令に任命された頃でした。以来、終戦を迎えて、つい先日まで、行く当てのない瑞穂の面倒を、ずっと見てくださっ

ていたのです。

そんな提督が亡くなったのは、一か月前のことでした。

この部屋は、提督が最後の時間を過ごした場所で、亡くなった場所でもありません。息を引き取った提督の顔は、とても穏やかなものであったと、記憶しています。

ささやかな葬儀を執り行い、提督の遺言通り散骨をして、ようやく数日前に落ち着いたところでした。

葬儀後、一旦トラック諸島に戻った艦長は、今日、提督の遺品を引き取りにいらしたのです。これで本当に、全部おしまい、なのです。ね。「瑞穂は、何か残しておいて欲しいもの、ないかな」

筆筒の洋服を段ボールに移し替えていた艦長が、そんなことを訊いてきました。

「母さん、自分の遺品については何も言っていなかったからね。でも、君が何かを気に入って、手元に残してくれるなら、きつと喜ぶと思うんだ」

そういうもの、なのでしょ。うか。近しい方を亡くすという経験がない身ですから、あまり想像が付きません。

手を止めてしまっていることに気づき、片付けを再開しながら、瑞穂は部屋を見渡します。

あまり多くのものを持つとするとする方ではありませんでした。部屋も質素そのもので、あれだけ輝かしい戦績を残していたはずなのに、勲章の一つも飾られていません。あるのは、いつぞや瑞穂が気に入って買ってきた花瓶と、小さな置物が二、三個だけです。それ以外は、ほとんど生活必需品でしたから。

考えながら瑞穂は一つのものに目を止めます。お茶碗やお皿、湯飲み。ここに提督を訪ねるようになってから、彼女が瑞穂用にと置いてくれた食器です。提督とご飯を食べるときは、いつもその食器を使っています。

「ではあの、食器類をいただいても・・・？」

「？お茶碗とか、かな。もちろん、いいよ」

艦長は笑って、快諾してくれました。

部屋の片づけは、一日あれば十分終わりました。本当に、物少なく、生活されていた方なのですね。整理した遺品は、段ボール四つ分で事足りてしまいました。

「悪いんだけど、瑞穂。この段ボール、「大和」まで運ぶの、手伝ってくれないかな」

「大和」は、終戦時に艦長が艦長を務めていた（ややこしいですね、この言い方）戦艦です。艦娘の大和さんは、艦長と一緒にいることを選び、今はトラック諸島で暮らしています。

「ええ、もちろん。ああ、でも、少し待ってください。大和さんへの差し入れ、持ってきてますから」

「いつもすまないね、ありがとう」

艦長が台車に段ボールを移し替えている間に、瑞穂はすぐその自室まで駆けて、差し入れを取ってきます。大和さんは、ここサイパンで手に入るバナナと、私の作るバナナチップスを大層気に入っていました。ですから、艦長がサイパンを訪れる際には、いつもお土産として持たせているのです。

小さな段ボールに詰めたバナナと、缶に入れたバナナチップスを持って、艦長のところへ戻ります。二台の台車に段ボールを乗せた艦長が瑞穂を待っていました。

台車の一つを瑞穂が引き受け、二人で港湾施設の方へと歩きだします。向かうのは、「大和」の内火艇が横っけている、浮棧橋です。

最盛期は埠頭や錨地に多くの船が停泊していましたけど。今、サイパンの埠頭に横付けているのは、「瑞穂」だけです。沖に錨を下ろしているのも、「大和」一隻のみ。

・・・いいえ。そもそもこの島は、もう。

「瑞穂、お盆って知ってる?」

隣を歩く艦長が、唐突にそんなことを訊いてきました。瑞穂は首を横に振ります。

「お盆っていうのは、死んだ人の魂が、あの世からこの世に帰ってくる日のことだね。八月の真ん中位を指すんだけど」

「そんな日があるのですね」

もうすぐ七月も終わりですから、あと二週間ほどでお盆ということになります。

「ふふ。でしたら提督は、あの世に行ってから一か月ちょっとで、こつちに戻ってきてしまうのですね。慌ただしい方です」

「あの母さんのことだから、喜んで戻ってきてさうだけどね。それも何日か早く」

「そうかもしれません」

そんな他愛もない会話がありました。

埠頭へとたどり着くまで、艦長がお盆の話をいくらかしてくれます。迎え火というものを焚くこと。胡瓜と茄子で精霊馬というものを作ること。今年は新盆というものになるので、白い提灯を飾ること。

八月になったら、瑞穂もそのあたりを用意しておかないといけませんね。

浮栈橋につくと、段ボールを内火艇に移し替えます。たった四個ですから、一分もせずに作業は終わりました。

艦長が内火艇のエンジンを始動します。

「瑞穂。本当に、一緒に来る気はないんだね」

確認するように、艦長が問いかけます。すでに話し合ったことです。瑞穂の意思は変わりません。

「はい。瑞穂はここに残ります。瑞穂は、ここがいいんです」

一番長い時間を過ごした場所です。一番思い出のある場所です。提督がここを選んだように、瑞穂もここを最後の場所に選びたい。ただそれだけなのです。

「それに、提督がお盆より早く、来てしまうかもしれませんから」

瑞穂の言葉に頷いた艦長は、それ以上を問いませんでした。代わりに笑顔を浮かべて言います。

「お盆の頃に、また来るよ」

内火艇は浮栈橋を離れ、沖の「大和」へと向かいます。やがて錨を引き上げた「大和」が、ゆっくりと港外を目指して動きだしました。

勇壮なその姿を見送り、瑞穂は踵を返します。瑞穂一人の世界へと。

◇

夏の日差しが照りつける中、愛用の麦藁帽を被った瑞穂は、朝から畑仕事に精を出していました。

元サイパン基地の敷地内で畑に向いていそうな土地を探し、土を耕して、種を蒔いたのです。提督が亡くなられたのをきつかけに始めた趣味ですが、近頃はすっかり板についてきたと、自分でも思います。

雑草をむしり、水の具合や葉の様子を観察していた瑞穂は、額を伝う汗に気づいて、顔を上げます。首から提げたタオルで、水滴を拭きました。

どれもいい育ち具合です。特に、茄子と胡瓜はそろそろ収穫の時期ですね。西瓜も一つ大きなのが育っています。

表面に張りがあり、陽光に当てられて光る野菜たちを見つめます。もちろん、瑞穂が食べるわけですから。

そろそろ、精霊馬の準備も、しないといけませんね。

そう考えた瑞穂は、特に育ちのよかった茄子と胡瓜を一本ずつ、ハサミで刈り取りました。

——時を止めた島に、今年もお盆がやってきます。

6、アイオワ

真夏の太陽が降り注ぐ常夏の島、ハワイ諸島はオアフ島。まさに夏真っ盛り、蒼い海と青い空に囲まれたこの島は、休暇を過ごすにはピッタリ。浮き立つ心を抑えろというのが無理な話だ。

そこかしこに観光客が行き交う中を、太陽を気にしながら歩く。

・・・そんな光景は、もう昔のものだ。

誰もいないメインストリート。人気のない店舗、ホテル、ビーチ。これが、ハワイの現状だ。

深海棲艦の侵攻を受けて、ハワイ諸島の放棄を合衆国政府が決めたのが、一年と六か月前。全島民が本土に避難して、残っている人間はほとんどいない。

全人口、わずかに二人。それが、合衆国五十個目の州、ハワイ州の現状だった。

そんな、ハワイ州に残された最後の二人の内の一人が、私、アイオワだ。もう一人は私の艦長。

合衆国海軍の命で取り残された私たちの任務は、オアフ基地の機能を最低限維持し続けること。反攻作戦後にここを取り返した海軍が、できるだけ早くその機能を復旧できるようにすること。

・・・なんて、もつともらしい理由が付けられているけど。理由はもつと単純で、合衆国がハワイを手放したわけではないことを内外に示すためだと、私も艦長も知っている。

合衆国はハワイを見捨てない。必ず取り戻す。そのための、体のいい「英雄」に私と艦長は選ばれたわけだ。

私たちに白羽の矢が立った理由は、それこそ語るほどのことでもない。ハワイ放棄作戦の際、丁度「アイオワ」の推進器がトラブルを抱えていて、航行不能状態だったからだ。

かくして、傷を負った英雄となった私たちは、二人で過ごす二度目の夏を満喫していた。



市街での所用を済ませ、真珠湾へと戻った私は、古びた守衛所を備えたフォード島への橋を渡る。しばらく歩けば、戦艦が横づける埠頭に辿り着いた。一年前には太平洋艦隊の戦艦たちが集っていた場所も、今は「アイオワ」が横づけるのみ。艦首方向の先には、一隻、沈没した戦艦「コロラド」の残骸が残っている。

それらを特に気にすることもなく、私はいつも通りにタラップを登っていった。三番砲塔横の甲板に辿り着く。

「お、戻った戻った」

そう言っただけで声をかけてきたのは、当然艦長だった。ただし、私が彼女を艦長と認めるのに、わずかばかりの時間を要したのも事実だ。なぜなら、彼女は普段の軍服とは程遠い格好だったからだ。

一瞬下着ではと見間違ふほどに布地の少ない水着。装飾なんてない素っ気ないデザインが、逆に艦長のプロポーションを引き立てる。揺れる二房の胸は、超弩級と言って差し支えない。

残念ながら、海軍に水着を支給する伝統はない。となると、これは艦長の私物ということになる。だけどこんな水着、彼女はもっていたのだろうか。

「ただいま、キャプテン。どうしたのその水着」

「近くのホテルにあったのを、拝借してきた」

窃盗である。まあ島民のいないこのハワイで、それを咎める者はいないが。これまでも、生活必需品の類を拝借したことはあった。一応リストを作つてあるので、あとで会計に突きつけてやるつもりだ。

「どう？ 似合う？」

そんなことを言いながら、艦長が腰をクイツと曲げた妙なポーズを披露する。セクシーなつもりだろうか。

「そうね・・・」

自分の目が半目になっているのを自覚しつつも、私は艦長の体の上から下まで見る。

「何というか、はち切れそうよね」

水着をぱんぱんに張っている胸を指でつつく。予想通りと言うべ

きか、ムニユツとした感触が返って来た。大した弾力だ。

「アイオワも人のこと言えないけどね」

笑って言いながら、艦長は私の胸に指を当てた。彼女の言う通り、制服が弾けそうという意味で、私も相当のサイズだ。

「私が揉んだから育ったのかな・・・？」

などとのたまいながら、どきくきに紛れて胸を揉もうとしてくる艦長。それを手で押し留め、私は色欲魔から距離を取った。

「それ、迷信よ」

「確かめるためにはデータが必要じゃない？」

「人類が数千年をかけて証明したでしょ」

揉むだけで胸が育つなら、世の女性たちは苦勞していない。

不満げなエロ艦長の視線を無視して、私は持っていた袋を彼女に押し付ける。週一回の定期便——本土から空輸で届いた支援物資の生鮮食品類だ。

「ほら。ふざけてる暇があったら、冷蔵庫に入れるの手伝ってよ」

「はい」

まったくもって、返事だけは一人前の艦長なのだ。

軍艦の夕食は結構早い。五時には食べ始める。別に私たち二人だから、律儀に守る必要もないのだけれど、体に染みついた習慣として、結局この時間を守って生活していた。

夕食の準備をするのは私。その背後で、艦長はごそごそと何事かを始める。

「二〇〇〇年七月〇〇日。快晴。絶好の海水浴日和！」

日課としてつけている音声記録に、艦長が声を吹き込んでいる。公式なものではないし、何を吹き込もうと自由なのだが、もう少しまとめた内容はないのだろうか。開口一番で海水浴の報告を始める軍人とかどうなんだ。

「アイオワ、ほらおいでーアイオワも何か言いなよー！」

夕食の準備をしている私を、艦長はお構いなしに呼んでくる。溜め息が漏れるのは許してほしい。感情表現豊かな艦娘で売っているの

だ、私は。

「もう、料理中だつて言ってるでしょ、キャプテン」

「じゃあ、せつかくだから、今晚のメニューの解説を」

「そんなんでいいの？」

思わず苦笑してしまう。この艦長が、全く軍人らしくないのは、今に始まったことじゃない。

音声記録に夕食のメニューを残してどうするのか。後でお偉いさんに聞かせて、胃袋を攻撃するのだろうか。

「今日はアイオワ特製のステーキよ」

「ステーキ！えっ、てことはこれから甲板で焼くの？」

「もちろん。一六インチ砲の火力を見せてあげるわ」

「わーお、こんがり焼けそうね。さすがアイオワ特製」

そんな、本当にどうでもいい軽口だ。こんなやり取りばかりが、この音声記録には収められている。一年以上の間撮り溜めてきた、私たちの日常だ。

数分の録音が終わると、下準備をした肉を持って、甲板に上がる。一六インチ砲は冗談だけど、しっかり熱した鉄板の上で焼いてこそ、本物の肉だ。艦内は火気厳禁だから、甲板で火を起こしてやるしかない。

分厚く切った肉の焼けていく音。飛び散る肉汁。ついでに付け合わせのピーマンやらポテトやらも焼いていく。それを見ている艦長が、よだれを垂らして喰らいついてくるのを片手で押し止め、肉を裏返す。

私の好みはミディアムレア。艦長はウエルダン。焼き加減を見極めて肉を切り分け、皿に盛る。一年もやってれば、かなり板についたものになっていると、我ながら思う。

艦長が、折り畳みの机と椅子を、甲板に準備し始めた。ここで食べる気満々だ。

丁度、サンセットがきれいな時間帯でもある。この景色を見ながらというのも、悪くないかもしれない。

焼きあがったステーキに、艦長がかぶりつく。夕陽にきらきらと瞳

を輝かせ、それはそれはおいしそうに、彼女は笑うのだ。
そんな表情はずるい。反則だ。そう思うくらいには、私は艦長のこ
とが好きである。



ガソリンを補充したジープのエンジンをかけ、私は艦長がやって来
るのを待っていた。

今日は二人で外回りだ。島内の視察、という名目だけど、人っ子一
人いないこの島に視察する場所もない。だから半分以上は、二人揃っ
ての息抜きだ。

ただ、まあ……ここ最近気になっていることがないわけでもない。
だから今日の視察は、その辺りの疑問解消も含んでいたりする。

「ごめんごめん、お待たせ」

舷梯を駆けてきた艦長が、そのまま助手席に乗り込んでくる。制服
ではなく、まさかの私服だ。もはや突っ込む気もない。

「それじゃあ、出すわよ」

クラッチを入れ、ジープを出す。

常夏の空気が、心地よい風となって吹き込んできた。サングラスを
かけた艦長は、どこかかっこつけて髪を押さえている。それを横目で
窺う私は、なんだか彼女をエスコートするボーイフレンドみたいな気
分になってきた。

「それで、ひとまずどこへ向かうの？」

今日の行き先を尋ねる。艦長は少し悩んだ素振りの後、市街の一角
を示した。

「これだけ探しても見つからなかったし、最初に立ち返ろう。窃盗の
被害が一番多かったのは、あの辺りだし」

「アイ・ママ」

目的地までジープを走らせる。電気の供給は止まっているから、信
号なんて用はなさない。そもそも、私たち以外に走る車もない。道端
に放置されている車両はちらほらあるから、それだけ気を付けて運転

すればいい。

走り抜ける市街地は、相変わらずの静寂を保っている。人がいないから、ごみもない。本当に何も無い。でも、そこには賑わいの香りがいまだに残っていて、私を妙な気分にした。

「少し、気味が悪いよね」

ぽつりと、艦長が呟く。

気味が悪い。それはそうかもしれない。艦長の指摘が、多分、私の感覚に一番近い。

まるで時間が流れるのを拒むように、この島は一年前から何も変わっていない。

やがて、目的地にジープがつく。道端に車を寄せて、止めてから、私たちはシャッター街の真ん中に降り立った。

人の気配はない。それはわかっているが、二人で辺りを見回す。見回すだけでは足りないから、とにかく歩いて、色々なお店を覗き込む。何度見ても、何の変哲もないシャッター街だ。ゴーストタウンと言うには日が浅く、やはり本当に、人氣がしなくなつた、寂れただけの歓楽街に見える。

どうしてこんなところに、視察へ来たのかといえば。四か月くらい前から、窃盗の被害が出ているのだ。

・・・確かにまあ、似たようなことは私たちもやっているわけだけど。でも、私たちはこの辺りに足を踏み入れている。それに、私たちが拝借するものは、軍からの定期便では補えないもの、具体的には食料品以外がほとんどなのに、この辺りでの窃盗被害は、その大半が食料品だ。

動物の仕業とは思えない。盗まれたのは缶詰や乾燥食品みたいな、保存がきいて、気密性の高いものだ。どう考えても人間の仕業に違いない。

私たち以外に、この島に残っている人がいるかもしれない。だとすれば保護する必要がある。

「アイオワ、こつち！」

艦長が声を上げた。彼女の指さす先には、わずかに開いた様子のあ

るシャツター。

二人で示し合わせて、ゆつくりとシャツターを押し上げる。差し込んだ光が露わにしたのは、床に敷かれた毛布や、転がっている空の缶詰。

そして・・・部屋の隅で、じつとこちらを窺う、四つの目。

艦長に目配せをする。頷いた彼女は、殊更ゆつくり、可能な限り音を立てず、部屋の中に踏み入る。

「お名前は？」

艦長の微笑みに、暗がりの中から、人影が現れる。

くせつけの強い、栗色の髪の男の子。ぼさぼさだが、艶やかな黒髪の女の子。どちらかといえば、アジア人っぽい顔立ちの二人だ。

男の子が、女の子を庇うようにしながら答える。それを聞き届け、頷いて、艦長はもう一度笑った。

「よかったら、お姉さんたちと一緒に、来ない？」

そんなことがあって、「アイオワ」の住人が二人増えたのだった。

7、祥鳳

常夏の島にこの表現もおかしいのですが——真夏にふさわしい陽光が、頭上から燦々と降り注いでいます。透き通るような空気と、抜けるように青い空、海。常夏の名に違わぬ、晴れやかな島です。

米海軍所有のオアフ島・真珠湾基地。三番埠頭に身を休めていた私、祥鳳は、一週間を過ごしたこの島に対し、改めてそんな感想を思い浮かべていました。

「祥鳳、出港用意はどう？」

艦橋中央に立つ私に対し、軍服姿の女性が尋ねます。肩には少佐を示す徽章。

「出港部署配置、完了してます。いつでも出せます、提督」

私の返答に、彼女——提督は、満足げに頷きました。

提督というのは、何隻かの軍艦が集まった艦隊を率いる指揮官に与えられる役職です。隣の彼女は、「祥鳳」の艦長と「祥鳳」隷下の機動部隊を指揮する提督を兼任しています。どう呼びするか迷った末、私は「提督」と呼びすることにしました。

「それじゃあ、帰ろうか。出港、舳離せ」

その号令で、艦首尾の舳が離されます。艦橋から見える前甲板上では、二人の乗員が岸壁から離れた舳を巻き取っているところでした。

そもそも、日本海軍所属の私が米海軍の基地に身を置いていた理由は、一週間前まで遡ります。

ハワイ解放作戦。日米合同で行われたこの作戦は、五年近くにわたって深海棲艦に占拠されていたハワイ諸島、及び同地の真珠湾米軍基地の解放を目的としていました。元は米軍単独での実施予定だったのですが、ダイヤモンドヘッドに「陸上型」の深海棲艦が確認されたことで、作戦発動を前倒しした、という経緯があります。実施時期を早めたことによる戦力の穴を埋めるために、日本海軍も作戦に参加することになったのだとか。

そんなハワイ解放作戦で、「祥鳳」には艦隊直掩と同時に、また別の任務が与えられていました。それは、陸上型の調査隊を、オアフ島へ

送り届けること。この調査隊の派遣が、作戦への協力に対する米国との取引の結果でした。

そうした経緯があつて、私は作戦終了後に真珠湾へ入港し、一週間ほど米軍基地に間借りをしていたのです。

この一週間、「祥鳳」が身を休めていた岸壁が、次第に遠ざかっていきます。タグボートに引かれた艦体は徐々に埠頭から離れ、私は常夏の島に別れを告げました。

周辺警戒も兼ねて、真珠湾港内を見回します。五年間、深海棲艦に占拠されていた割には、真珠湾の港湾施設はとてもきれいで、破壊の痕跡は全く見当たりません。かと言って、深海棲艦が使っていた訳でもない、というのですから。そういったところが、深海棲艦の不可思議なところと言えます。

．．．いえ、もちろん、完全に無傷という訳ではありません。

湾中央に浮かぶ島を航過しようとしたとき、私の目にあるものが止まります。穏やかな真珠湾にあつてただ一つ、戦闘の激しさを色濃く残すものです。

黒い煤で覆われ、焼けただれた状態で擱座する一隻の戦艦。艦首、艦体中央、艦尾の三つに分断されたその骸は、真珠湾の只中に、寂れた威容を残して佇んでいます。

米海軍の戦艦「アイオワ」です。五年間、この真珠湾を守ってきた、英雄とでも言うべき戦艦でした。ハワイ解放作戦に際し、その艦体は無数の砲爆雷撃にさらされ、奮戦虚しく真珠湾に没していました。

大破着底し、ずたずたに引き裂かれた「アイオワ」に、すでに主の姿はありません。いまだ原型を残す艦橋のふちから、今にも金髪美女が手を振りそうですけれど。そんなことは、決して起こりませんでした。

私の横に立つ提督が、軽く会釈をしたのがわかりました。いいえ、彼女は両の手を合わせ、合掌しているのです。失われた艦と、その艦娘、艦長に。

私もそれに倣います。胸の前に手を合わせ、わずかに頭を垂れます。閉じた瞼の裏で願うのは、安らかな眠りのみ。米国の宗教観は日

本と違うのでしようが、死者の魂の安寧を祈る点は、万国共通なのだと思います。

十数秒間の祈りを終え、私が顔を上げると、隣に立つ提督が、寂しげな微笑みを浮かべていました。

タグボートからのロープが離され、「祥鳳」は真珠湾の出口となる水道へ差し掛かります。

「出港部署開け。通常航海へ」

提督の号令を受けて、「祥鳳」は通常航海の体制に移行します。前後部甲板で舳を取る作業をしていた私と提督以外の乗員が、艦内へと戻ります。

航空機の搭乗員を除けば、「祥鳳」の乗員は提督と私を含めた六人だけです。艦の運航はこの六人で完結しています。こう見えても、第三世代艦娘ですから、私。大抵のことは一人でできるんです。えへん。水道を抜け、他艦と陣形を組み、既定の針路に乗ったところで提督が制帽を取り、それを合図に私たちは緊張を解きます。あとは自動航法で、針路を保ってくれますから。

「行こうか、祥鳳。『お客さん』の様子を見てこないと」

提督がそう言って、ニカツと笑います。その言葉で、私は改めて、提督が言った「お客さん」に想いを馳せました。

元々乗せていた乗員と航空隊員、それに調査隊員以外に、真珠湾基地で新たに乗せた二人。おそらく、長らく孤立していたハワイの、唯一の生き残りです。

軽やかな足取りで階下へと下っていく艦長の背中を、取り急ぎ私も追いかけてました。

◇

提督が引つ張り出してきた機械に、私含め三人分のクエスチョンマークが、「祥鳳」の食堂に生じていました。

何と言うのでしょうか。箱型の上部に、レバーが横についていて、下部は何かを入れるのか空間になっています。何に使う機械なのか、皆

目見当もつきません。

「これは・・・なんですか？」

私の内心を代弁するように、黒髪の小柄な少女が提督に尋ねます。少女ともう一人、彼女の隣に立つ栗色の髪をした少年は、提督がオアフ島で保護した兄妹です。彼ら自身が提督への同行を望んだので、こうして〔祥鳳〕に引き取っています。日系移民の末裔ということである程度は日本語での意思疎通が可能でした。

「氷かき・・・かき氷機だよ」

「かき氷機？」

三人分の問いかけが、一つに重なります。

「まあまあ、見せて」

ニコニコと笑いながら、提督は冷凍庫から大きな氷を取り出ししました。一辺が十センチくらいある、見たことがないほどの大きさです。キラキラと透き通った輝きを放つ氷塊を、提督は慣れた手つきで、かき氷機にセットしました。それから、下の空間に、透明なガラスの容器を置きます。

「行くよ」

そう言つて、提督はレバーを回し始めました。すると、先程セットした氷がゆっくりと回転しだしました。その回転に合わせて、シャリシャリと小気味のいい音がリズムカルに響きます。

「わあああつ」

食いつくようにかき氷機を見つめていた妹さんが、感嘆の声を上げました。シャリシャリという音に合わせて、削れた氷の欠片が、綿雪のように降り注いでいました。風で揺れる落ち葉か何かのように、削れた氷が一枚二枚と、容器の中に降り積もっていきます。

妹さんも、お兄さんも、もちろん私も、その様子を食い入るように見つめていました。チラリと兄妹の顔を窺えば、氷に負けないくらい両の瞳を輝かせて、五センチに達した積雪の様子を見守っています。提督はますます笑みを深めて、さらにレバーを回し続けました。

やがて、容器の上にこんもりと、雪山ができあがります。薄い氷の膜が折り重なったそれは、今にも崩れそうに儂く、夏という季節を考

えれば、どこか浮世離れたものにも思えました。熱でわずかに溶けた水滴が、雪の上を伝って蛍光灯の光を宿しています。

「味は何がいい？イチゴと梅と、宇治抹茶があるよ」

提督の言葉に、兄妹が顔を見合わせました。お兄さんの方が、妹さんに順番を譲ります。ふんふんと鼻息も荒く頷いた妹さんは、両の拳を力一杯握りしめて、同じくらい力強い声で答えました。

「イチゴ！」

「イチゴだねー」

了解、と答えた提督は、「イチゴ」というラベルの張られた瓶を傾け、中に入ったピンク色の液体（シロップでしょうか？）を、氷の上に回し掛けました。降り積もった雪山に、液体がゆつくりと染み込んでいきます。

「はい、どうぞ。イチゴのかき氷だよ」

シロップをたっぷりかけた氷——かき氷を、提督が妹さんに差し出します。今か今かと待ちわびていた様子の妹さんは、それはそれは嬉しそうに、ガラスの容器を受け取っていました。

「二気に食べると、頭がキーンとするから、気をつけてね」

テーブルに陣取って、早速雪山の切り崩しにかかり始めた妹さんに、提督が注意を促します。それを聞いていたのか、いないのか、スプーン一杯のかき氷を頬張った妹さんは、すでに額のあたりを押さえ、悶えています。

その様子を苦笑しながら眺める提督は、二つ目のかき氷に取り掛かっていきます。お兄さんが選んだ味は梅です。先ほどと同じように、提督は慣れた手つきで、さらさらと氷の山を作っていきます。できあがったそれに、今度は「梅」と書かれたシロップを一かけ。かき氷を受け取ったお兄さんも、妹さんの隣に腰掛けて、シロップの染みた綿雪をすくい始めました。数秒後には、妹さんと同じように、目をきつく瞑って頭を押さええています。

「祥鳳はどうする？」

三つ目の器を用意して、提督が私に尋ねました。

流れで行けば、宇治抹茶でしょうか？氷にお抹茶をかけるって、想

像がつきませんね。どんな味がするのでしょう。

それに。味も気になりますけど、私は何より、かき氷機の方に興味があります。

「提督、私が削ってみても、いいですか？」

私が尋ねると、提督は強く頷いて笑いました。

「うん、いいよ。こっちおいで」

提督に手招きされるまま、私はかき氷機の隣に立ちます。そのまま、こわごわとハンドルを握りました。これを回せば、氷が削れるのですね？

「最初は一緒にやろうか」

そう言った提督が、私の後ろに立ちます。背後から伸ばされた手が、ハンドルを持つ私の手に重ねられました。それからゆつくりと、提督がハンドルを回し始めます。

「これくらいのスピードで回し続けてね」

「は、はい」

提督が手を放して、今度は私が一人でハンドルを回します。こうして回してみると、意外と重いですね。手にはしっかりとした感触が返ってきます。もちろん、氷を削る、跳ねるように爽快な感触も。

「上手だね、祥鳳」

「そうですか？」

「うん。すごくきれいに削れてるよ」

提督が指さす先、容器に積もっていく氷の様子を、私はかき氷機の隙間から確認しました。そこには、提督がやったのと同じように、薄く輝く薄氷が折り重なっています。

ハンドルを回すこと、およそ一分。一山分積み上げられた氷を取り出し、シロップの瓶を手に入れます。随分と濃い緑色をした液体を、全体にまんべんなく、一かけ。

できあがったかき氷を手にも、改めて見つめます。氷の冷たさが、ガラスを通して手のひらに伝わってきました。見た目も温度も、夏にはぴったりの一品です。

「できたてを食べちゃいなよ。私の分は自分で削るから」

提督に言われるまま頷いて、私も自分で削ったかき氷を手にも、兄妹の前に座ります。夢中で氷を食べている二人に倣って、私もスプーンで氷をすくい、ゆっくりと口に運びました。

口に含んだ瞬間、氷が熱で溶けていきます。薄く薄く、それこそ雪のように削ったからでしょうか。はらはらと儂く、舌の上で氷が水になっていきます。

その時、強烈な甘みがやってきました。舌の上を伝う甘さ、それから鼻に抜ける微かなお茶の香り。冷たさと相まって、思わず身を震わせてしまうようなおいしさ。

すごいです。これがかき氷。これは確かに、夢中になって食べてしまうのもわかります。削った氷にシロップをかけただけなのに、冷たくて、甘くて、やみつきになる。こんなに甘いのに、すぐに口から消えてしまうのが、不思議でたまりません。

二口目をすくい取り、すぐに口へと運びます。宇治抹茶の色に染まった氷が、私の口へ収まりました。

次の瞬間、頭に割れるような痛みが走りました。天を振り仰ぎ、額を押さええます。提督の言っていたことを、完全に失念していた私でした。

「だから注意したのに」

自分の分のかき氷に三種類のシロップをかけつつ、提督は笑っていました。

その後、「祥鳳」艦内でのかき氷機が必要が急上昇したのは、言うまでもありません。

8、吹雪

戦争が終わって、初めての夏がやって来ました。

ほんの一月前まで、深海棲艦と戦争をしていたんです。それが突然終わった今、安堵というよりも、拍子抜けしたという心地が、わたしたちの感覚に近いと思います。

どこかふわふわと掴みどころのない喜び。そんな中で迎えた夏は、艦娘も人も、なんだかソワソワと過ごす季節になりました。

蝉の声も下火となってきた、ある日の午後。鹿屋（正確には、鹿屋の近く、ですけど）基地配属のわたし、吹雪のもとに、お客様がやって来ていました。

とつても珍しいことです。というより、わたしが鹿屋の配属になってからは初めてのことです、基地外からお客様が来るなんて。それも、海軍の中でも、結構なお偉いさんです。

そしてそして何より、今日のお客様は、わたしの艦長の、お母様でもあります。

朝起きた時から、艦長もいつもよりソワソワしています。顔を洗う時。髪を整えるとき。食事の時から、執務中まで、午前中ずっと落ち着かない様子です。時折——いえ、かなりの頻度で、時計を気にかけるながら、午前中を過ごしていました。

そんな艦長の仕種が伝染してしまつて、わたしも朝からソワソワします。

お母様については、艦長からいくらかお話を聞いています。戦争の初期から、艦長や提督をされている方で、今はサイパン基地の司令官を務めているのだとか。

——「戦争が終わって、上も色々会議とかしてるみたいだし。それに出席する前の、寄り道つてところじゃないかな」

というのは、艦長の推測です。確かに、基地司令を務める方が、そう簡単に任地を離れたりはできませんしね。

ともあれ。久方ぶりの来客にてんやわんやの鹿屋基地（とはいって

も、配属はわたしと艦長だけですけれど）に、入港を告げる汽笛が鳴り響きました。

鹿屋基地の埠頭に入って来たのは、「吹雪」によく似た駆逐艦でした。艦橋の窓から、岸壁の様子を窺う、少女の顔が見えます。わたしも彼女とは何度か顔を合わせているので、もちろん知っていました。「久しぶりだね、曙ちゃん！」

タラップから埠頭に降り立った少女に手を振ります。サイドテールに大きなミヤコワスレの飾りをつけた曙ちゃんが、いつものつれない感じで返事をしました。

「久しぶり、吹雪。一年ぶりくらいね」

「そうだねー」

わたしと曙ちゃんは、一時期同じ基地に所属していました。その時からの縁です。

もう一人、曙ちゃんの艦長さんも降りてきます。彼は、私の艦長と何やら言葉を交わしていました。当然ですけど、お二人ももちろん知合いです。

そうして、一番最後に降りてきたのが。

「久しぶりね」

柔らかな微笑みを湛えて、一人の女性が「曙」の甲板に佇んでいます。相応に刻まれた皺と、白髪の混じる頭が、彼女の人生を物語っているようです。それでいて、その笑顔は軍人に見えないほど、とても温和なものでした。

「久しぶり、母さん」

艦長が女性をそう呼びます。彼女がサイパンの基地司令、艦長のお母様、みたいですね。

お母様（この呼び方でいいんでしょうか）が、ゆつくりと「曙」から降りてきます。ただ、お母様が歩いているわけではありません。彼女は車椅子に座り、膝に毛布を掛けていました。代わりに、車椅子を押す女性が一人。

「お初にお目にかかります。瑞穂と申します」

お母様を埠頭に降ろした女性は、そう名乗ります。サイパン所属の水上機母艦、その艦娘でした。

「短い間だけど、お邪魔するね」

「うん。しっかりと羽を伸ばしてね」

微笑みながら会話をする、艦長とお母様。やっぱりこうして見ると、話し方とか、笑い方とか、似ていますね。

お母様と瑞穂さん、曙ちゃんと艦長さんを、鹿屋基地の宿舎へ案内します。今日は久しぶりに、賑やかな夜になりそうです。夕食担当のわたしも、腕が鳴るといふものでした。



「花火大会に行きましよう！」

〔曙〕入港の二日後。朝食の席でそんなことを言い出したのは、瑞穂さんでした。きらきらとした瞳で、食堂に集まったわたしたちを見つめます。

花火大会の開催は今夜。鹿屋からほど近い浜辺がメイン会場となり、鹿児島湾の船上から花火を打ち上げます。戦争のせいで長らく自粛ムードだったそうですが、終戦と相成った今年は、久しぶりに開催が決定したのだとか。

「面白そうだね」

ニコニコして、艦長が一番に賛意を示します。

「私も花火見てみたかったんだよね。今まで見たことないから」

生まれた時には、もう戦争が始まってたしね。艦長が言います。まだ三十歳を迎えていない艦長は、言われてみれば確かに、戦争が始まってから産まれた世代でした。

「見てきたらいいよ。きつと楽しいから」

お母様もそう言って笑います。曙ちゃんと艦長さんは何も言いませんが、満更でもない様子でした。

こうして今夜は、みんな花火大会と相成ったのです。

今日の執務を終え、うきうきで花火大会の支度をしていたわたしに艦長が声をかけたのは、気温が日中の最高点を過ぎたあたりでした。手招きに従って艦長の部屋へ入ったわたしは、以来十数分、艦長にされるがままとなっています。

と、いうのも。

「ん・・・よいしょっと」

わたしの服装を姿見で確認しながら、艦長が帯の位置を調整しています。

今、わたしが艦長に着付けてもらっているのは、浴衣です。艦長が私物として持っていたものを、タンスから引っ張り出してきたのだとか。

——「中学生のころ、母さんがくれたものなんだ。丁度、吹雪くらしいの体格なら、着られると思って」

そう言って、艦長は笑っていました。

艦長が出してくれた浴衣は、淡いピンク（桃色でしょうか）を基本色として、彩り豊かな花があしらわれたものです。帯は全体を締めるような黄色。これ以外にも、下駄や髪飾りなどが一式揃っています。

えへへ、こういう、おめかしをするのは初めてなので、新鮮な気持ちです。今からもう、ウキウキが止まりません。

「よし、完成。ちよつと自分でも見てみて」

わたしから離れた艦長が、姿見の角度を見やすいように調整してくれます。鏡に映る自分自身と、わたしは対面しました。

普段のセーラー服とは、まったく違ういで立ちの、わたし。鏡に映ったその姿がなんだかむず痒くて、頬が熱くなります。

艦長の顔を窺います。姿見を持って立つ彼女は、いつも以上に、ニコニコとご機嫌です。

「横とか、後ろはどう？」

「あ、はい。えつとですね」

艦長に言われた通り、わたしは身を翻して、右と左、そして後ろまで鏡に映します。わたしはこういうの初めてで、よくわからないのですが、とてもいいのではないかと思えます。

「どう、ですか？」

「うん、完璧。とつてもよく似合ってるよ」

艦長がパチパチと拍手をくれます。

そんな艦長も、橙を基調として、暖色系の落ち着いた浴衣を着ています。こちらもお母様からの贈り物だそうです。高い位置でまとめた髪も相まって、どこかのお嬢様のような雰囲気がありました。

「執務も早く終わったことだし、一足早く出かけようか」

「いいんですか？」

「いいのいいの。戦争は終わったんだし、どれだけはしゃいだって、誰も咎めないよ」

そう言って笑う艦長が眩しいです。

でも・・・そう、なんですよ。戦争は終わって、もう、艦娘の一番はありません。

わたしは戦争の時代しか知りませんが。きっとこれから、色んなものが元通りになっていくんだと思います。それがわたしには——
——いえ、わたしたちには、とても新鮮なんです。

艦長の部屋を出ると、曙ちゃんとはったり会いました。制服を脱ぎ、タンクトップにジーパンというラフな格好をした曙ちゃんが、ぱちくりと瞬きします。

「吹雪、その浴衣どうしたの？」

「艦長が着せてくれたんだあ」

えへへ、こういうのって、やっぱり見せびらかしたくなりますよね。

わたしは曙ちゃんの前で、くるりと回って見せます。

「へえ、よく似合ってるじゃない。かわいいわよ」

珍しく素直な誉め言葉に、自然と微笑んでいました。

日も沈んで、午後七時半。いよいよ始まるうとしている花火を前に、会場は多くの人で賑わっていました。

人の間を縫うようにして、わたしたちは会場近くの二階建ての建物を目指します。その屋上に、車いす専用スペースが設けられているからです。

「ありがとうね、瑞穂」

「いえ、お礼には及びませんよ、提督」

瑞穂さんは終始ニコニコとして、お母様を押しています。お母様と一緒にいられることが、心の底から嬉しそうです。

一方、曙ちゃんは、さつきからずつと黙ったままです。というのも

——「曙、手を繋ごう」

——「はあっ!？」

——「これだけの人混みだ。はぐれたら大変だろう」

——「こ、子供扱いするなっ!」

そんなやり取りがあつて、曙ちゃんは今、艦長さんとしっかり手を繋いで歩いているのです。顔を真っ赤にして、可愛いですnee、もう。照れているのがバレバレです。

・・・まあ、そんなわたしも、艦長と手を繋いでますけど。

細くしなやかな艦長の手は、とても軍人のものとは思えません。長い指と柔らかな手のひらが、わたしの手を包み込んでいます。「お母さん」というものをわたしは知りませんが、もしいたのならきつと、こんな風に手を繋いでくれるんだと思います。

買ってもらつたりリング飴を片手に、雑踏の中を歩きます。老若男女、家族、恋人、老夫婦、たくさんの人が笑顔で行き交います。

周りから見れば、わたしたちもそんな、ありきたりな家族に見えるのでしょうか。夜の景色に溶け込んでしまうような、どこにでもいる家族でしょうか。

「?どうしたの、吹雪?」

「・・・いえ、なんでもないんです」

そう、きつとそれは、本当に何でもないことなんです。取るに足らない、改めて口にするまでもないことです。

目指していた建物に辿り着き、二階の開放スペースへと上ります。車椅子でも入りやすいようにと、かなり余裕を持って取られたスペースには、同じように集まった人たちがいます。まもなく始まる花火を待ちわびて、皆さん歓談ムードです。

「特等席ね」

車椅子のお母様が、ニコニコとして艦長を見ます。笑顔で頷く艦長は、人生初めての花火に胸を躍らせている様子でした。

かくいうわたしも、なんだか妙な緊張が。花火とはどんなものでしょう。大きな音がすると聞いていますが、どれくらい大きいんでしょう。目を奪われるほどきれいと言いますが、どれくらいきれいなんでしょう。

艦長と見る花火は、わたしの瞳に、心に、どう映るのでしょうか。

『これより、花火の打ち上げを、開始します』

スピーカーからアナウンスが流れました。柔らかな女性の声を合図にしたのか、会場のざわめきが示し合わせたように収まっていきます。誰もが空を見上げ、その瞬間を、固唾を飲んで見守っています。

わたしたちの見つめる先、鹿児島湾の方から、不思議な音が聞こえてきました。気の抜けた口笛のような、ひよろひよろと甲高い音です。海面から天へと、音が伸びていきます。

そうして、夜空に大輪の花が咲きました。

最初に開いたのは、赤と緑が鮮やかな花火です。夜空の中に、パツと光が走り、瞬く間に広がります。数えきれない光の粒たちが、優美に尾を引いて、漆黒の中に輝いています。

息を飲む間がありました。わたしだけではありません。会場に集い、同じように花火を眺める人たちが、祈るように、願うように、息を飲みます。呼吸なんてできない。瞬きすら忘れるほどの光に、一瞬で心を奪われました。

最初の一発を皮切りに、次々と花火が打ちあがります。一発目の余韻に引かれるようにして、花が、華が、咲き乱れます。夜の草原が、たちどころに鮮やかなお花畑へと変わっていききました。

手すりから乗り出すようにして、花火に見入ります。

赤、緑、黄、橙、紫。色が広がり、重なり、混ざり合って。まるで一つ、大きな大きな絵を描くように。それはまるで——夢のような

光景。夢のように美しく、きれいな光景です。

「・・・きれいだね」

隣で空を見上げる艦長が、しみじみと言いました。いまだ言葉が出てこない私は、黙ったまま、ぶんぶんと頷きます。

光の尾が、驟雨のように降り注ぎます。空を見上げる人ばかりを、きらめく星のような輝きで飾ります。光は揺らめく海面にも反射していて、鹿児島湾全体を照らそうとしているようでした。

「きれい、ですね」

貼り付いた喉から、ようやくそれだけの言葉が出てきます。窺った艦長は、真つ直ぐにこちらを向いて、微笑んでいました。とても素敵なものを見つけたように、笑っていました。

その笑顔が、やっぱり眩しくて。それは彼女の顔に反射する、花火のせいではありません。艦長の笑顔は、いつだって輝いて、わたしの憧れです。

「・・・艦長」

「ん？なあに？」

言いたい言葉は、きつと果てしないほどあります。伝えたいことなんて、もしかしたら無限にあります。

わたしは今、幸せです。大好きな人たちと、こうして花火を見ているのですから。輝く光の共演を、穏やかな時間の協奏を、眺めているのですから。それはきつと、これからずっと、わたしが吹雪である限り、大切にしていけるものですから。

だから結局、わたしの言いたいことは、この一言に集約されているのです。

「また来年も、来ましようね！」

今できる全力で笑い、わたしは艦長に言います。丁度花開いた光が、艦長の白い顔を、流れる黒髪を、碧い瞳を照らしました。夢と現のはざま、艶やかな夜の中で、艦長もまた強く微笑みます。わたしの右手に、艦長の左手を重ね、ぎゅっと握って、笑います。

「うん、もちろん。来年も再来年も、何度だって来よう」

その笑みが、言葉が、心が、たまらなく嬉しくて。自然と頬が緩む

わたしはきつと、今世界で一番だらしのない表情をしています。

そしてきつと、世界で一番幸せな表情をしています。

X、コロラド

「いらっしやい。待ってたわ」

鈴の音を鳴らすように可憐な声色の主は、私——コロラドを見て、
けてそう言った。

燦々と降り注ぐ、地中海はシチリア島の陽射しの下。丁寧の手入れがされた庭園の中央、ガゼボの影から彼女は微笑んで手を振っていた。半年ぶりのその笑顔に、思わず頬が綻んでしまう。そういう不思議な魅力のある女性だった。この集まりが続いているのも、彼女の存在が大きいと思う。

イギリス戦艦、ウォースパイト。錦糸のような金髪、長い睫毛、ゆったりとした服装、流れるような所作、百花のごとくまばゆい微笑み。育ちの良さが滲み出る、貴婦人だ。

そのウォースパイトが、ガゼボの庇の下から、優雅に手を招いている。彼女を含め、いつもの面子は大体集まっていたみたいだった。「遅かったじゃない。待ちくたびれたわよ」

真っ先に声を上げたのは、私から見て正面に座る、ビスマルクだった。ウォースパイトと同じように、しなやかな金髪。けれど彼女は、全く飾り気のない、ストレートヘアだ。どこか頑固で軍人然とした佇まいは、初めて会った時から変わらぬ。お国柄ゆえだろうか。

「ボンジュール。先に始めてしまったわ」

それからもう一人、先客がいた。光の加減で白にも見える金髪に緩いウェーブをかけているのは、リシユリユード。ウォースパイトと同じように、華のある人ではあるけれど、「雅」よりも「艶やか」の方が似合う笑顔を見せる。あと、背が高くスタイル抜群だ。羨ましい。

お茶会仲間たちの挨拶、またウォースパイトがクツクツと控えめに笑った。

「さ、いらっしやい、いらっしやい。こちらに座って」

そう言っつて、ウォースパイトはすぐ隣の椅子を、手で示した。勧められるまま、私はウォースパイトの隣に腰掛ける。

今日は、半年に一回のペースで開催している、お茶会の日だ。大西

洋周辺の戦艦娘を中心にして、メンバーを集めている。主だったところは、ここにいる四人とリットリオ、ローマ、アイオワ、ネルソンの計八人。先の戦争で、最後のユトランド沖海戦に参加したことを縁にして集まっているメンバーだ。

「コロラドは、ダーズリンでよかったかしら」

「ええ。レモンティーがいいわ」

私の要望に、ウォースパイトはにこりと笑って、薄くスライスされたレモンが入っているタッパーを取り出す。お茶会の度、私が楽しみにしているのが、この紅茶だ。普段はコーヒーばかり飲んでいるから、たまには違う趣向も中々にいい。

茶葉を取ろうとして、ウォースパイトがその体をよじる。それに合わせて、ギシリと、彼女の車椅子が音を立てた。ユトランド沖海戦で下半身不随になって以来、彼女はずっと車椅子での生活だ。

ユトランド沖海戦前の、ウォースパイトの姿を思い出す。イギリス艦隊旗艦として、壇上から艦隊を鼓舞する、すらりとした立ち姿をぼんやりと思い浮かべる。あの時の彼女を、もう一度見ることは叶わない。

ただ、それで何かが変わったわけでもない。ウォースパイトは相変わらず穏やかで、高貴な美しさがある。輝く微笑には一点の曇りもない。だからまあ、私は何も変わっていないと思っっている。

「で、何か土産話はないの、コロラド」

少々感傷に浸っていた私を現実に戻したのは、片目でこちらを窺うビスマルクだった。元ドイツ艦隊旗艦で、察しのいい彼女には、私の感傷がわかってしまったのだろうか。

「んー、害虫が大量発生して、トウモロコシ畑が半分食われたことくらいかな」

主食とバイオ燃料用だったから、割と死活問題だったりする。備蓄はあるから、今すぐ生死に関わるなんてことはないけれど、この先も害虫対策は考えておかなければ。

「・・・なかなか洒落になってないわね」

ビスマルクが苦い顔で言う。ここにいる面々は、大なり小なり、農

業や漁業や畜産業に手を出している。害虫の恐ろしさは、身に染みて知っているはずだ。

「私のところも、気を付けないとね」

「あなたのジャガイモ畑は、むしろ半分くらい食われるべきだわ」

リシユリユーが横から半目でビスマルクに言った。

「何？どういう意味よ」

「ジャガイモばかり食べているから、ドイツ人はいつまで経っても田舎者なのよ」

カチリ。何かの引き金が引かれる音を、私ははっきりと聞いた。ビスマルクの笑みが引きつっている。

「余計なお世話ね。アンタももつとジャガイモ食べなさい」

「いらないわ」

「大量に送り付けてやるから」

「マツシユポテトにして、イギリスに輸出する」

あまりにも低レベルすぎる元艦隊旗艦たちの言い争いに巻き込まれたウォースパイトは、きよとんとしてこちらを向いてきた。その表情は「えっ、私？」という彼女の本音を雄弁している。

あーっと。私は少し考える。

「ポテトサラダにしたら、おいしいかも」

ひねり出したのはそのくらいだ。凝った料理なんてできないから、ポテトサラダぐらいしか思いつかなかった。

「ええ、そうね。それがいいかもしれないわ」

拍手を打って賛同してくれたウォースパイトが、私の前にレモンティーを差し出してくれた。淹れたてのレモンティーからは、得も言われぬいい香りが漂う。カップに浮いたレモンに紅茶の色が透き通って、琥珀のように輝いていた。

そつとカップを持ち上げて、まずは香りを楽しむ。芳醇な紅茶の薫りに、爽快なレモンの香りが混ざっている。暖かな湯気に包まれて、それらが鼻孔をくすぐった。

カップにそつと口をつける。ウォースパイトに限って、紅茶が熱いことなんてない。おいしい紅茶の適温は、いつも程よい暖かさだ。何

のためらいもなく、私はカップの中身を含む。最初にやってきたのは、レモンの仄かな酸味だ。それから徐々に、紅茶のほろ苦さが伝わってくる。けれど、どちらもそれほど強くはない。お互いに調和して、程よいバランスを保っている。さすがはウォースパイトだ。

「おいしい」

カップから口を離して呟いた私の言葉に、ウォースパイトは満足げに笑って会釈をした。

「ビスマルク、リシユリユー。貴女たちも、おかわりはいかが？」

「いる」

ウォースパイトの問いかけに、全く同時に答える二人。言い争いは多いが、何だかんだと仲が良いことに、いい加減皆気づいていた。

「ボンジョルノ、コロラド。着いてたのね」

談笑（と、時たま言い争い）していた私たちに、背後から声がかかった。

薄い茶色の、カールがかかった髪を一つにまとめ、肩から流している。背丈もスタイルも、ビスマルクやリシユリユーに負けず劣らない。南国の花が似合う、ほわほわとした雰囲気の人だ。

イタリア戦艦、リットリオ。ここシチリア島の主である。

「久しぶり。ついさつき着いたところよ」

「そう。楽しんでいてね」

ニコリとしたリットリオが、お茶を飲んでいた四人を見回して、二回手を叩いた。

「さあ、もうすぐご飯ができますよ。準備してね」

レストランのマンマみたいなセリフを残して、リットリオはまたどこかへ行ってしまふ。できた昼食（時間的には夕食との間くらいだが）を取りに行つたみたいだ。リットリオはすこぶる料理が上手い。

それまで遊んでいたカードを、いそいそと片付ける。お茶とおしゃべりばかり進んで、お腹は減る一方だった。いつもならウォースパイトが用意してくれるスコーンも、今日に限っては並んでいなかった。リットリオが昼食を準備していたから、あえて出さなかったのだろ

う。

やがて、真つ新になつたテーブルに、リットリオが料理を運んでくる。彩鮮やかなサラダ、スモークされたサーモン。ソーセージはビスマルクが持つて来たんだろうか。

「すごくおいしそうね、リットリオ」

隣のウォースパイトが、瞳をキラキラとさせて褒めちぎつた。リットリオは満更でもない様子で、華麗なウイंकを決める。あざとい。

「それから、ピッツアも」

「ピッツア!?!」

思わず素つ頓狂な声が出てしまったのも許してほしい。そんな贅沢なもの、食べるのは久しぶりだ。しかも作ったのは、本場イタリアの生まれであるリットリオ。おいしくない訳がない。

テーブルに出されたのは、間違ひなく石窯で焼かれた、ピッツアだった。それもかなり大きい。どちらかといえば、アメリカンスタイルのピザに近い大きさだ。見た目からすると、オーソドックスなマルゲリータだろうか。溶けかけのチーズが食欲をそそる。

「すごいわね・・・」

あのビスマルクが、啞然としてしまっている。よもやピッツアが出てくるとは、誰も思っていなかった。

「もう一枚ありますよー」

そう言つて、リットリオはさらにピッツアをテーブルに出す。今度のピッツアは、マルゲリータと違って、白い。見たことのないピッツアだ。

「これは?」

「ビスマルクがジャガイモを持つて来てくれたから、それを使つてみたの。ジャガイモとポツタルガのピッツアよ」

なるほど、そんな変わり種もあるのかと、感心してしまう。よく見れば、程よいサイズに切られ、あるいは潰されたジャガイモが、チーズの下に敷き詰められている。

「・・・ちよつと待つて。あなたまさか、この島にジャガイモを持ち込んだの?」

恐ろしいものを見たかのように、リシユリユーが声をわななかせる。答えるのは当然ビスマルクだ。

「ええ、当たり前でしょう」

「シチリア島はジャガイモの輸入禁止よ！」

初めて聞く法律を、リシユリユーは持ち出してきた。

「いいじゃない、ジャガイモ。あなたも好きでしょ」

「ノン！ノン！ノン！毎日毎日、ジャガイモばかり食べさせられた私の気持ち、あなたにわかって？」

「何それ、最高じゃない」

「こ……これだからドイツはっ」

リシユリユーには珍しく、目を三角にしていきり立つ。

「いいこと？今後一切、私にジャガイモを近づけないで頂戴。田舎臭いのがうつるわ」

「ギャーギャーうるさいわね。フランスもさっさとジャガイモの傀儡になればいいのに」

「いいえ、お断りよ。アメリカに亡命して、断固抵抗するわ」

えっ、私？そう思うのは、今度は私の番だった。俗にいうとばっちりという奴だろう、これは。

「はいはい。お二人の仲が良いのはわかりましたから」

呆れ気味な微笑を浮かべて、リットリオがさらに追加の料理を持ってくる。すでにものすごい量なのに、パスタまで出てきた。それも、大皿に乗って三種類。

「……完全に、ランチの域ではないわね」

私は見たままに率直な感想を漏らす。リットリオは照れたように笑って、答えた。

「作っているうちに、もうダイナーでいいんじゃないかなあつて。興が乗っちゃいました」

何ともリットリオらしい答えに、私は思わず笑ってしまった。今ここに、妹のローマがいたら、間違いなく溜め息を吐いただろう。

「冷めないうちに、召し上がってください」

リットリオに勧められるまま、フォークを取る。この日限りの豪華

なご馳走に、私たちは舌鼓を打った。

◇

翌日も、シチリア島は快晴だった。だから、私たちは予定通り、海水浴に来ている。

海の碧さは、空とはまた違ったものがある。透き通る海水と、反射する太陽光。それらが複雑に織り込まれて、一つの色を作っている。

「海なんて久しぶりね！」

海水浴ができるような場所に住んでいないからか、ビスマルクが感嘆の声を上げた。彼女の着ている水着は、いわゆる競泳用のもので、ゴーグルまで装備して泳ぐ気満々であった。

かくいう私も、海に入るのは随分久しぶりだ。足先に触れる波が冷たくて、くすぐつたい。遠い水平線を見つめると、無性に気持ちが掻き立てられて、走り出したい衝動に駆られる。

「さ、泳ぐわよ！」

「いいですね。競争しましょうか」

ストレッツチを終え、今しも飛び込もうとするビスマルクに、リットリオが賛同する。彼女はというと、面積の少ないビキニに、パレオを巻いていた。

そんな二人を、「正気？」という目でリシュリユーが見つめていた。彼女もリットリオと同じように、ビキニにパレオだけど、サングラスと麦藁帽子もセットで着けている。こちらは完全に、海に入る気がない。

「楽しんでくださいいね」

そして、ウオースパイトといえば、パラソルの下で、こちらを見守るモードになっている。一応、彼女も水着には着替えているけれど、上からパーカーを羽織っていた。さすがに、車椅子では、海に入れない。

「ほら、行くわよ」

ウオースパイトを見ていた私の、水着の肩紐をビスマルクが引つ張

る。あわや脱げそうになって、私は慌てて、彼女に着いて行った。私もリットリオヤリシユリユーと同じビキニだけど、布面積は多めだ。シチリアの海に飛び込む。最初は冷たく感じた。けれど感覚が慣れるにつれて、心地よさが勝ってくる。海水からの浮力の分、体が軽くなつて、不思議な感じだ。

「気持ちいいわね」

早速潜水していたビスマルクが、そう言いながら水をかけてくる。頭から海水をかぶつて、私は早々にずぶ濡れになった。

「・・・やってくれたわね」

口角が吊り上がるのがわかる。私は一先ず、目の前のドイツ戦艦を黙らせることにした。純粹な火力で言えば、一六インチ砲装備の私が一番強いんだから。

水の掛け合いと水中の競争がしばらく続いた。久しぶりに泳いで体力を消耗した私は、何とかビスマルクの追撃を振り切つて、浜辺に辿り着く。そして何気なく、陸に残った二人の方を見た。

パラソルの下に、二人分の人影がある。ウォースパイトとリシユリユーは、ドリンクを片手に何かを話しているようだった。

波打ち際を離れ、私は二人の方へと歩いていく。びしょ濡れの髪を絞ると、ぽたぽた水滴が漏れた。前髪からも、雫が滴る。

「ウォースパイト」

私の呼びかけに、ウォースパイトは小首を傾げて応えた。

「どうしたの？」

・・・私は、ウォースパイトを、海に連れて行こうと考えていた。すぐに言葉は出てこない。そもそも、どうしてそんなことを思ったのかすら、定かではない。自分で自分の気持ちだが、行動がわからないのだから、言葉にしようがない。

それに、私では、ウォースパイトを海に連れていけない。アイオワくらい背丈があつて、力もあれば、ウォースパイトを抱え上げて海に入れるだろう。でも、この中で一番小柄な私に、そんな芸当はできない。

でも・・・下半身不随になつても、何一つ以前と変わらなかつた

ウォースパイトが、海にだけ入れないというのは、おかしいと思った。足が動かないくらいで、海を諦める必要はないと思った。

ただ、それだけだった。

「海に行こう、ウォースパイト」

やっとの思いで、私は自分の考えを口にする。ウォースパイトは驚いたように目を真ん丸に見開き、それから笑った。その笑顔は、初めて見る、寂しげなものに思えた。

「ありがとう。でもいいの。私はここで、」

「ノン」

ウォースパイトの言葉を遮ったのは、リシユリユーだった。サングラスを押し上げ、デツキチエアから体を起こし、その双眸で私とウォースパイトを見ている。

「行きましょう。私も手伝うわ」

立ち上がった彼女は、腰に巻いたパレオを外し、サングラスと一緒に麦藁帽子の横に置いた。間髪を入れずに、車椅子のブレーキを解除する。

「えっ……あ……」

ウォースパイトはあたふたとするばかりだった。所在なげに宙を彷徨う左手を、私はそつと握る。リシユリユーのおかげで、覚悟はできた。

言い出したのは私だ。だから私が、エスコートしなくては。

波打ち際のぎりぎり、リシユリユーは車椅子を止めた。ビスマルクとリットリオも駆けつける。

正面に回った私は、ウォースパイトの両脇に手を入れて、抱え上げる。リシユリユーが車椅子を引いてくれて、背中側からはビスマルクとリットリオも手伝ってくれた。

足先からゆつくりと、海へ入っていく。

「わっ……わぁ」

ウォースパイトは相変わらずされるがままだった。彼女の足に感覚はない。細い足先は動かない。だから私たちが支えて、慎重に慎重に、海の中へ入っていく。車椅子を片付けたリシユリユーも、後から

海に入ってきて、手を貸してくれた。

やがて、ウォースパイットの体が、完全に海中に入る。もうほとんど、私の腕にかかる力はない。彼女は波に揺られて、海に浮いていた。

きよろきよろと、ウォースパイットは私たちを見回した。パクパクと声にならない言葉をいくつか漏らし、それから彼女は、泣きながら――あるいは笑いながら、言った。

「ありがとう。とても心地よいわ」

エメラルドグリーンの上にごぼれたその笑みが、この夏最高の思い出だったと、私は思うのだ。

Ω、はじめに

生命とは、いつしか終わりを迎えるものだ。

生まれたものはいずれ必ず死ぬ。どれだけ高度に医学が発達しようとして、細胞の中に仕組まれた死へのカウントダウンは変えられない。生命にはすべからず、避けられない終焉の時というものが用意されている。

生命の終わり方には、大別して二つの種類がある。「事故」と「寿命」。早い話、細胞分裂が限界を迎えるか、その限界よりも前に外的要因で死を迎えるかの二つだ。

それは何も、「個」としての生命に限った話ではない。「全」としての種族にもまた、絶滅という形で終わりが訪れる。外的要因、内的要因、絶滅の要因は多種多様なれど、種族という全体もいずれ滅びを迎えることに変わりはない。

近年、生命における「寿命」に該当するものが、各種族にもあるのではと言われている。それはあるいは、「進化」の行き止まり、「発展性」の喪失とでも表現するべきかもしれない。生命としての発展性を失った時、種族は絶滅へと向かっていく。

恐竜がよい例だろう。一般に恐竜が絶滅した原因は、小惑星の衝突による環境の激変と言われているが、必ずしもそうとは言いい切れない。小惑星の衝突以前から、恐竜という種族の絶対数は減少傾向にあったことがわかつている。小惑星の衝突は恐竜を絶滅させる「とどめ」にはなつたかもしれないが、直接の原因ではないとする学説もある。そして、この絶対数の減少こそが、生命の発展性の喪失、進化の行き詰まり、種族としての老衰を意味している。恐竜の場合、その「寿命」は一億五千万年だったというわけだ。

発展性を失った時、生命（個と全を問わず）が死を迎えるというのなら、逆にこの発展性こそが、生命の本質とも言える。明日の我が身が、今日よりも良いものであろうとする努力こそが、生命の正体だ。

この発展性という点において、人類は最も生命らしい種族と言えただろう。日進月歩の言葉通り、人類はあらゆる生命にも増して、発展

への欲求が強かった。昨日よりも今日、今日よりも明日、明日よりも明後日。産業革命後の百年に限っても、その発展は実に信じがたい速度であった。

だからこそ、人類は発展を止めることができなかつた。発展性を否定してしまえば、自らの存在を、生命としての意味を否定することになると、本能的に理解しているからだ。故に生き急ぎ、渴望する。更なる発展を、と。

では、果たしてその発展は、永遠と言えるだろうか。もしも、発展性がのびしろのようなものであつたら、人類は自らの存在意義に固執するあまり、結果としてその寿命を急速に消費していたことになるのではないか。

片鱗は見え始めている。急すぎるハード（あるいは文明、技術とも）の発展に、明らかにソフト（あるいは思想、倫理とも）が追い付いていない。人類は息切れを始めている。

のびしろを使い果たした時、発展性を失った時、人類という種族は緩やかに絶滅へ向かう。技術は失われ、希望は失われ、今日と同じ明日がやって来る。効率と発展を履き違え、失敗と決別したその日、人類の絶滅は決定的なものとなる。

それでもなお、しがみつくというのなら、当然の帰結として、人類を滅ぼす者が現れる。地球という生命の星が——星という生命が、さらなる発展のために、古い細胞を切り離す。哺乳類が恐竜に成り代わったように。その中でホモ・サピエンスが台頭したように。

戦おうと、抗おうと、彼らが去ったその時が、人類終焉の日だ。